

271. 平成9年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その2）

8. 弥生時代後期の墓域と集落を調査 栗東町綾・北中小路 へそ 総遺跡

総遺跡は野洲川左岸扇状地中位の微高地上に位置する。標高は約95mである。中山道沿いの大字綾から大字北中小路の範囲に広がる主に弥生後期の墓域と中近世の集落遺跡である。

14世紀以降の集落は現在の北中小路の集落と重複しているが、その集落を囲む幅2～5mの環濠が検出されている。弥生時代の墓域は守山市に近い遺跡の北側微高地頂部にあり、これまでに中央に墓道をもち列をなして14基の方形周溝墓が確認されている。その範囲はおおよそ長さ200m、幅70mに及ぶ。周溝墓は一辺10～20mで、全容の不明なものを除きすべてコーナー部または一辺の中央に陸橋をもつものであり、そのなかには陸橋部を外側へ拡張するものも含まれている。

今年度の調査は面積800㎡で、新たに3基の方形周溝墓を確認した。全容のわかるSX14は一辺10m、周溝は幅3～5m、深さは最深部で90cmを測る。対角するコーナー2か所に陸橋を設け、両サイドには他の周溝墓が在存し、溝を共有している。周溝底から弥生時代後期前半の壺1個体と一木の直伸鋤が2点出土した。

周溝墓から南西400mの別地点の調査（面積470㎡）では周溝墓と同時期の溝1条と掘立柱建物を検出した。溝は幅1.7m～3m、深さ20cmで延長30m分を確認。途

中幅1.5mの溝が枝分かれする。掘立柱建物は、この溝の土器が集中する付近で検出された。桁行3間で3.8m、梁間1間で3.5m。柱穴は直径30cmである。総遺跡では弥生時代の建物は初の出土であり、周溝墓群を築造した集落になる可能性が高い。

（勸業栗東町文化体育振興事業団 佐伯英樹）

9. 6・7世紀の竪穴住居6棟が出土 栗東町高野 いわはた 岩畑遺跡

町道路拡幅工事に先立ち300㎡の面積で調査を実施した。岩畑遺跡は野洲川左岸の扇状地上部に分布する古墳時代を主とする集落遺跡である。野洲川下流域に形成された沖積地の遺跡では最高所に立地し、標高は109m前後である。弥生時代には未開発であった当地を新たに開発した集落で、野洲川水系から引く灌漑用水の根元を押える水利上大変重要な位置を占める。これまでの調査では式内社の高野神社付近を中心として4～6世紀の竪穴住居160棟以上が出土しており、5世紀前半の住居にはL字形カマドがみられることから渡来人集団が灌漑技術に関わった事が推定されてきた。今年度の調査では6世紀の土坑や中世以降の耕作痕が出土した。

6世紀の竪穴住居は一辺4.5～5mで、北側壁中央にカマドをもつ。深さは約10cmであった。7世紀の竪穴住居のうち1棟は一辺5m、深さは5cmで北側コーナー一部分に屋内土坑（貯蔵穴）をもつ。土坑は80×50cmの弓形で深さ80cmを測り、屋内側には50×20cm、深さ5cmの段をもつ二重構造である。7世紀前半の須恵器杯身。杯蓋と土師器の杯が底近くで出土した。岩畑



方形周溝墓



調査風景

遺跡では近年7世紀の竪穴住居の出土例が増えてきており、先年度の調査では5棟が確認されている。竪穴住居の構造は7世紀になると小型化したものが多くなり、これが当地域の竪穴住居の最終形態のひとつである事がわかってきた。

(財)栗東町文化体育振興事業団 佐伯英樹)

10. 前方後方型周溝墓を発見

守山市播磨田町 はりま だひがし 播磨田東 遺跡

播磨田東遺跡は守山市播磨田町に所在し、東約500mのところ野洲川が流れる位置にある。

今回の調査地は遺跡の東端にあたり、共同住宅建築に先立って約550㎡を調査した。今回は検出した遺構のうち、古墳時代の周溝墓群(SX-2~4)について報告したい。

SX-2は周溝の一辺中央に陸橋部をもつタイプの周溝墓で、規模は一辺4.8m×5m、周溝の深さは10~50cmである。SX-3は陸橋部がやや前面に拡張してはいるが、溝は全周しないタイプの前方後方型周溝墓であり、一部のみ検出されている。周溝は深いところで約1.2m、端部の浅いところでは約80cmである。SX-4は陸橋部がさらに拡張し、溝が全周するタイプの前方後方型周溝墓で、規模は全長推定14m、前方部長5m、後方部長推定9m、前方幅3.7m、後方幅推定10.3mである。周溝の深さは、後方部側で約1.2m、前方部側で約30cmである。これらSX-2~4はほとんど時期差がなく、古墳時代前期のものと考えられる。

前方後方型周溝墓の形は、方形周溝墓の一辺の中央に陸橋部をもつタイプから、やや陸橋部が拡張するタイプ、さらに陸橋部が拡張するタイプ、そして拡張した陸橋部から後方部までを溝が全周するタイプというような発達過程がたどれると言われている。これまでに野洲川流域では前方後方型周溝墓が数多く検出されており、これらを概観すると、発達過程をたどれる前



調査地全景

述の4タイプが古墳時代前期に併存することがわかり、墳形の違いは階層差を表している可能性があると考えられる。今回の調査でも、ほぼ同時期で墳形の異なる周溝墓が隣接して検出されていることから、その可能性は高くなったといえる。

(守山市教育委員会 藤原恵美)

11. 独立棟持柱付建物の調査

守山市古高町 しもなが 下長遺跡



独立棟持柱付大型建物

下長遺跡は昭和58年に発見された遺跡で、今回の調査を含めて18次の発掘調査が実施されている。今回の調査地点は、旧河道が分流するとみられる微高地の先端にあっている。この周辺ではかつての調査によって琴・直弧文を施した刀の柄頭・銅鐸の飾耳・石釧・鏡などが出土している事から祭祀関連の遺構が存在するものと予想された。

今回の調査では調査区の東半部で旧河道が検出された。この旧河道は幅約40m、深さ約2mの規模で、多量の自然植物遺体や土器などが出土した。河道の最下層は細砂および砂礫の堆積がみられ、同層内より弥生後期前半~後半の土器が多数出土した。弥生後期には旧河道に水流があり河川として機能していたと考えてよい。この河道が埋没する過程で、少なくとも4回にわたって水田が造営されている。出土土器から推定すると、古墳時代前期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代と考えられ、古墳時代前期の集落遺跡が衰退する過程で旧河道に土器や木が捨てられ、旧河道そのものが埋没していったのであろう。畦畔の下には木が敷かれ安定させようとしている。旧河道の肩口には地形に沿って水路が掘削されていて、これは弥生後期~古墳時代前期の掘立柱建物を切っている。

微高地の先端には大型独立棟持柱建物を含む建物群が検出されている。大型建物は1間×3間(4.5m×7.8m)の規模で弥生後期末と推定される。さらに、同地点に2間×3間(4m×5m)の独立棟持柱建物が検

出されている。この2棟は規模や柱配置が同じで、同じ地点において建て替えられたと考えられる。出土土器から庄内式併行期と推定される。今回の調査では大型独立棟持柱建物が弥生末に消滅し、同じ地点に小型で心去り材を使用した建物に古墳時代初頭に変化する過程が明らかとなった。

(守山市教育委員会 伴野幸一)

12. 7世紀後半～8世紀前半の竪穴住居を検出

野洲町小篠原 あんじょうじ 安城寺遺跡

調査地は、野洲町内でも有数の遺跡密集地域である小篠原地区に所在する。今回の調査は、専用住宅の建設と宅地造成に先立つもので、各々約321㎡、約3,500㎡について実施した。

専用住宅建設地の調査地からは竪穴住居4棟、掘立柱建物2棟、井戸1基、溝数条などが見つかった。これらの遺構はおよそ3時期に分けることができ、7C後半～8C前半にかけての竪穴住居の時期、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物の時期、中世の掘立柱建物と井戸、そして耕作痕とみられる溝の時期とにわけられる。

4棟検出された竪穴住居は、各々南北方向に主軸をとるものである。このうち2棟はカマドを有するものである。2棟検出された掘立柱建物のうち1棟は、奈良～平安時代にかけてのもので、約0.8m×1mの大型の掘り方を有し、2間×4間の建物の東側に1間の庇をもつものである。この建物も竪穴住居と同様に、南北方向に主軸をとる。もう1棟は中世のもので、2間×4間の建物の北側に1間の庇をもつものである。

上記の竪穴住居は、野洲町内における竪穴住居としては最終段階のものであると考えられ、今後の周辺地域の調査が注目される。

宅地造成に先立つ調査地では、掘立柱建物10数棟、井戸7基、溝、旧河道などを検出した。時期的には中



竪穴住居と掘立柱建物

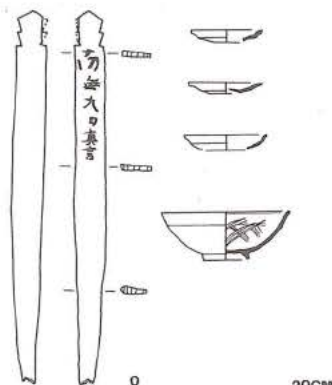
世の遺構が中心である。また遺物では、土師器皿、黒色土器碗などの日常雑器や、羽釜、足釜といった煮炊具などの土器が数多く出土しており、中世の集落としての様相をあらわしている。

また、晩期縄文土器の出土した土塚があり、町内における数少ない縄文時代の遺構として注目される。

(野洲町教育委員会 松田 学)

13. 木製の卒塔婆が出土

野洲町富波甲・乙 とほ 富波遺跡



SD01出土遺物

調査地は、富波遺跡の一角にあり、県道大津能登川長浜線沿いで湖南広域行政組合東消防署の北東約150mに位置する。

本遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡で大岩山古墳群の富波・亀塚

・古富波山古墳にも近接している。周辺地の調査では、東消防署の調査(宇犬上郷地区)で平安時代から中世の掘立柱建物群を検出し、調査地北東側(宇竹ノ花地区)で古墳時代中期から平安時代の掘立柱建物群や格子タタキ調整の軟質韓式土器が出土している。

今回の調査で検出した主な遺構は、中世の素掘溝・井戸・ピット等で、出土した遺物は黒色土器碗・土師器が主で、包含層より格子タタキ調整の軟質韓式土器が若干出土した。

また、溝から卒塔婆が出土している。卒塔婆は、現存で長さ44cm、幅4cm、厚さ0.8cmで、樹種はヒノキ科ヒノキ属の板目材を用い、表面には「南無大日真言」と墨書してあったものが消え、墨部分のみ木材がやせずに隆起した状態となっている。赤外線照射したが墨の残留は認められなかった。

卒塔婆が出土した遺構は、長さ16m以上、幅1.8m、深さ0.3mの溝で、東へ約30度振っている。溝のほぼ中央地点で中層から出土し、その他には土師器碗や皿が出土しているので、おおむね12世紀の様相を呈している。

木製の卒塔婆は、初七日・三回忌・七回忌などの法事に追善や供養のために7～8枚まとめて供えるものであり、近接してほぼ同時期の集落も検出されている

ことから、近くに中世墓地の存在が想定される。
(野洲町教育委員会 鈴木桃代)

14. 野洲川北流高水敷下の寺院跡の調査 中主町堤 堤遺跡

今回の調査は、新川の通水によって廃川となった中主町と守山市を分ける野洲川北流の、堤集落の西側に存在する堤防内高水敷下における、県営土地改良事業に係わる第3次調査である。

これまでの2回の調査においては、平成4年度に今回の調査地の東側で堤集落との間に灌漑を目的とした幅約10mの人口河川と左右兩岸堤防跡が発見され、平成8年度には今回の調査地の西側隣接地において石積基壇建物跡とその東側に土坑墓群を発見するという、河川敷下からの発見が相次いでいる。

調査は道路敷の4遺構面延べ約5,000㎡について、7月から12月末までの6か月間実施した。以下には上層より順に明らかとなった点について記す。

第1遺構面では、石積基壇建物が完全に埋没した後の再建建物の存在や周辺地における墓地化の状況を明らかにした。第2遺構面では、石積基壇建物の倒壊以後基壇が半ば埋まった状態での周辺地での小規模な掘立柱式建物や畑等が存在する状況を明らかにした。第3遺構面では、石積基壇建物の存在する時期に、その西側約33mに同じ南北方向の側溝を備えた築地土塁・門・堀・道路が存在することを明らかにした。さらに第4遺構面においては、石積基壇建物が建設される以前の旧河道とその後の水田を明らかにした。なお、基壇下の南側にはさらに古い瓦葺建物跡の存在を示す遺物群の出土があり、創建時期はさらに遡るものと考えられた。

今回特に注目されたものは、第2次調査において発見された石積基壇建物跡が、残存状況が悪く不明な所もあるが東西約11m、南北約35mの基壇上にあるもので、極めて細長い建物(17×4間)であった可能性が

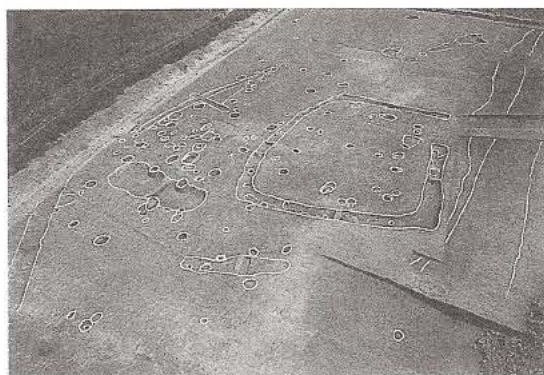


堤遺跡より三上山を望む

高いことである。この様な建物を現存する遺構から探す、現存唯一の九体阿弥陀堂である浄瑠璃寺本堂(11×4間・平安時代後期)や、円教寺食堂(15×4間・室町時代)、やや長大過ぎるが現存唯一の千体観音堂である蓮華王院本堂(35×5間・鎌倉時代)といった梁間を狭く身舎を横長とした大型一重仏堂と考えられ、特に前者である可能性は高いと考えている。今後の調査の進展が待たれる。

(中主町教育委員会 辻 広志)

15. 間野遺跡 5次調査の概要 近江八幡市鷹飼町・中小森町 間野遺跡



全景 南より

間野遺跡は白鳥川流域に位置する遺跡で、これまでも7世紀から8世紀頃までの集落跡等の遺構が密度濃く検出されている。

今回の調査では、これまでとは違った時期の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は全部で3棟、いずれも柱穴内の出土遺物より中世頃の時期と考えている。主軸はほぼ磁針方位の北に乗っているが、南側の1棟は東に少し振っている。しかし、ほぼ同時期のものと考えている。また、この3棟の他に溝で囲まれた建物遺構が検出されている。この溝は幅が約40cmで溝の底からも柱穴を検出している。さらに東北の隅に開口している部分が有る。溝の中からは土器と少量の炭が出土した。溝に囲まれた部分からも柱穴を検出しておりなんらかの建物遺構ではと考えている。しかし、現状では、はっきりとした事はわかっていない。ただ、可能性としては竪穴式住居の残滓として考えるのが良いのではないかと考えている。また、現在遺物や他の遺構との比較検討を行なっているので詳細が分かればまた、報告したい。

(近江八幡市教育委員会 奈良俊哉)